令和４年度　第２回社会教育委員会議　会議録（要旨）

１　日　時：令和４年１０月２５日（火）１０:００～１２:００

２　場　所：北九州市立生涯学習総合センター　３階ホール

３　出席者　委　員　　野依議長　他　１１名
　　事務局　　市民文化スポーツ局地域・人づくり部長　他１９名
　　事例発表者　１名

４　議題、議事の概要
（１）　市民文化スポーツ局長あいさつ（地域・人づくり部長代読）
（２）　議題
　ア　議長・副議長の互選について
　イ　北九州市生涯学習推進計画（令和３年度評価）について
　ウ　協議テーマに関する意見交換
　　①　前回協議のまとめと今回協議目的の説明
　　②　事例発表
　　③　グループワーク

５　主な質疑応答、意見等

議題（ア）議長・副議長の互選について

　委員による互選の結果、議長に野依智子委員、副議長に山田明委員、宮本和代委員が選出された。

議題（イ）北九州市生涯学習推進計画（令和３年度評価）について

（事務局：令和３年度評価について説明）

委　員：　令和３年度からの新しい計画は、前計画の（五つの）柱に比べて三つ（の柱）とし、シンプルにしたというのはすごくわかりやすいと思う。
　また、評価も、例えばモニタリング項目については、前年度より上がったか下がったかを矢印で可視化するなど、今までの単に数字を比較したのに比べてわかりやすかった。全体の流れが掴めて非常にわかりやすかったと思う。いろいろ工夫したことに対して、まずは敬意を表する。
　続いて、個々の項目についていくつか確認する。

生涯学習というと、どうしても従来から『学び』が中心、インプットが中心というイメージだったが、『学び』と『活動』の好循環、要はアウトプットの方につなげていこうというのは、昔の公民館のイメージからすると、良い活動だと思った。

そして、その『学び』と『活動』を循環させながら、この（計画の）柱1から3まで軸が貫かれているのは大変良いと思う。

しかし、資料の2ページの指標を見ると、「（生涯学習の情報が）取得はできている人の割合」が増えているが、「（過去1年間に）学習活動した人の割合」が減っている。

ここで言う「学習活動をした」というのは、単に学習したか、インプットしたかという質問ととらえてよいか。（計画の）柱である「『学び』と『活動』に参加」という、要はインプットとアウトプットをつなげた活動もしたかという質問ではないということでよいか。

事務局：そのとおりである。

委　員：（生涯学習情報を）取得できている人が増えているにもかかわらず、学習した人は減っていることについて、原因等を追究しているのかを知りたい。

事務局：　原因追究は現実的には難しい。推測にはなるが、令和元年度からの推移を見るとコロナの影響が非常に大きく、実際に活動をするまでには至らなかったという方が非常に多いかと捉えている。

委　員：　（生涯学習）情報は収集できているが、自分がどの『学び』とか『活動』に繋げていけばいいのかいうことを、自分が一市民になって考えた時に、活動・アクションに繋げるには、ハードルが少し高いかと思う。

さいたま市の（令和3年度の）「（生涯学習）ガイドブック」には、一問一答、例えば「学ぶことが好きだ」YesNo、「今、何か学んでいることがある」YesNoのような短答式で答えていくことで、「あなたへのお勧めは『市民大学ですよ』『ボランティアですよ』」など、絞られた選択肢が出てきて、次のアクションに繋がるようなガイド（フローチャート）があることを参考に紹介する。

続いて、資料の3ページの「市立図書館における市民1人当たりの貸し出し冊数」について。

市民1人あたり年70冊となっているが、違和感がある。図書館協議会の資料で調べると令和2年度は1人2.5冊になっていた。数値を確認していただきたい。

続いて資料の8ページ、柱2の2番目の指標で、実際に「地域活動に参加した人の割合」が減ってきている。これを今後どうしていくか、それに向けてどうするのか。内閣府の調査でも、半数以上が社会活動参加をしていないという数字がまさに、ここでも合致していると思った。

ここをどうするのかというのは少し難しいが、要はアクションをどうしていくかを考えなければいけないと、確かに思った。

続いて、柱３の資料 12 ページ、13 ページ。

先ほど事務局が言ったように、やはりコロナにより対面活動、従来の繋がりが希薄になっている。これは、現在の課題としては非常に大きなことだと思う。

13 ページの指標の二つ目、「子育てに関する悩みや不安を感じるという回答をした保護者の割合」が増えたが、これはやはりコロナが増えたからということだろう。

子育てに限らず、繋がりが希薄化して、高齢者の方も友人と会って話したり、歩いたりする機会がなくなった。このような問題をどうするかが非常に大事だと思う。

（１４ページの）計画の柱３のモニタリング項目に、子育て世帯や高齢世帯に対してどういうアクションを取るかという項目が必要と思うが、それがあまりない。

他の自治体の事例であるが、2020 年度に東京都千代田区で、多くの地域活動が休止になる中で、どのような交流の場が求められているのか、どうしたらいいのかについて、例えば、「気さくに声かけ合って交流できる場を町中に作るにはどうしたらいいか」など、16 のテーマを設けて千代田区民の皆さんが活動された。（ちよだコミュニティラボライブ！2021 に向けて「近年の地域の変化を新型コロナウイルス感染症が千代田のつながりとコミュニティに起こした課題を乗り越えるための 16 の問い」：2020 年の地域の状況を踏まえ、オンラインの交流の場をどう作るのかを、今、千代田で考えたい 16 の問いに整理、活動する方と意見交換したもの。）

（そのテーマの一つである）「地域の力を生かして子どもたちの学び体験の機会を豊かにするには」ということについては、以前、この会議の事例発表で北九州市立足立市民センターの例が紹介された。

北九州市は大学が多いので、「学生と地域が効果的に繋がるには」、「学生が地域と繋がる意味は」みたいな 16 の問いを設けて、なくなったその繋がりをどのように地域で作り直していくかという活動こそ、ここのモニタリング項目として入れるべきではないかと思う。

今のモニタリング項目は、シビックプライドなどを含めたところで意義はあると思うが、今の課題を考えたときモニタリングすべき内容とは少し離れていると思った。

事務局：　図書館の数値については確認する。

地域活動については本当に難しい状況で、自治会の加入率の減少やコロナの影響、その中で繋がりづくりをどうするのかが非常に重要なテーマとなっている。先ほど、委員から情報提供いただいた、さいたま市のガイドブックや千代田区の取り組みも参考にしていきたい。

また、繋がりづくりでいえば、今年度から外国人の方や障害をお持ちの方に対して、生涯学習の視点からバリアフリー事業の取り組みを進めているところである。

このコロナ禍、そしてアフターコロナの時代に突入するにあたってどうすべきかが課題だと思っている。今後も引き続き、取り組みを進めて参りたい。

委　員：　資料４ページの「学びの相談体制づくり」(「４　生涯学習総合センター学習相談事業」）について、評価が「大変順調」となっており、（評価理由欄に）施設ボランティア（学びサポーター）の「パソコン何でも相談」が増えたからとある。

その他の相談の内容、例えば「今の自分が学習したことを役立てたいが、どうしたらいいだろうか」というような相談がなかったのか、パソコン（相談）がほとんどなのかということ知りたい。

事務局：　相談体制づくりは、パソコン、読書活動、そのほか生涯学習に関わる各種相談全部について、学習機会や学習の場のアドバイスもできる体制として、幅広くとらえている。

具体的には「学びサポーター」というボランティアの方に主体となって動いてもらっているが、この「大変順調」というのは、パソコン以外の生涯学習活動の機会などに対する相談も含めた件数実績値で判断している。

委　員：　進捗状況の評価理由に、その文言があれば（いろいろな相談ができることが）わかりやすい。

また、学んだ人が学んだことを活用できたということも評価できるので、ぜひその文言を追加してほしい。

議題（ウ）協議テーマに関する意見交換

（事務局：① 事務局から前回の協議のまとめの発表、及び本日の協議テーマについて説明）

② 事例発表

「市民講座『ともがき』講座から市民活動への展開
～THE SDGｓ！市民活動者を育て・つなげて、地域を活性化する館長の取組み～」
(西門司市民センター)

館　長：　今から見ていただく動画の講座は、令和２年にスタートさせた。

コロナ禍で、本当にやっていけるかどうかがわからないままに進めた講座から事業への展開、それから事業がどのような形で次年度まで続いていくかの流れ、さらに、子どもの講座「『未来の種』事業」へ展開するという流れの 10 分間の動画を見ていただきたい。

【動画上映】

【社会教育主事から館長へのインタビュー】

主　事：　館長は、今まで着任された市民センター３館で地域史づくりをし、その後、市民活動へと展開している。最初の市民センターで何か手応えを感じたからこそ、地域史にこだわった取り組みをしているのではないかと思うが、いかがか。

館　長：　着任したよそ者の私が地域に興味を持って接すると、それに応えてくれる地域の住民が必ずいる。そういう方たちと話をしているうちに、この地域にどういう課題があるのかということを深く掘り起こしていきたくなる気持ちが働く。よそ者の視点で、地域のことをよくご存知の方に出会えるように、常にアンテナを高くするのがスタートではないかと思う。

市民の方たちは、自分の地域に大きな興味を持つ館長には、かなり接近してきてくれるので、そこから（反対に住民の方のほうが）自分たちの住んでいる地域に目覚めていくという瞬間がある。

そのような瞬間に幾つも出会いながら、地域史を掘り起こしていくことが、地域の宝になるのではないかという考えにたどり着いた。関心がある方たちを集めて郷土史の研究を進めていった結果が、最初の地域史「ふるさと『朽網』今昔」に繋がった。市政 50 周年の事業の一環として、地域の皆さんが作成し、宝になった。

主　事：　地域の方たちはそこに住んでいると、当たり前になり過ぎていて自分の地域の宝に気づかないことがある。そこに対して、よそ者の視点で館長が入っていたときに、「あ、こんな宝がある」と気づき、またそれを伝えていくことで、地域の人たちがこれは宝だという自覚を持って、語り継いでいこうという喜びに繋がっていくのだと思った。

館　長：　自分たちが地域史づくりに関わることによって、他の校区の人がすごいと認めたり、報道関係で取り上げてもらったりという社会的承認というのも、そのエネルギーを持続させていくことに繋がっていったのではないかと思う。

主　事：　これだけの成果物を作っていくと、でき上がったときの喜びは本当に大きなものだと思う。

また、地域を知り、この地域が好き、この地域に誇りを持てるという思いが、この地域を良くしていくために自分は何ができるかという、次のアクションに繋がっていくのではないかと思った。

その点では、先ほどの動画にも出ていた「『未来の種』事業」の西門司小学校の校歌にある地域の「誉れ」を探していくというのは、事業内容は違っても、根底にある目的というのが一致していると感じた。

館　長：　最終的にそのような子どもの事業に展開していくが、その地域の方々にとっても自分たちの地域史、新たな地域史だったと思う。

今回見ていただいた動画は、自分史づくりの講座からの発展なので、まず個人の戦争体験や水害体験を語り、それが原稿となり、その原稿が集約されて一冊の冊子ができ上がった。

そこをしっかり取り組んできた人たちを核として、それが子どもの講座に展開していくときには、地域の人が主体的に自分たちのその地域史を子どもたちにも

伝えたいという気持ちを持つことに繋がっていく。

それ以外にも（地域の）伝統芸能なども一緒に子どもたちに伝える機会になったと思う。

主　事：　私も事業を見学したが、地域の方たちが、この地域の子どもたちを育てていこう、この地域を愛してもらいたいという思いが強く伝わってくる講座だったと思う。

地域史づくりの話に戻るが、館長の中で、地域史が地域を活性化させていく起爆剤になるという確信があったと思う。館長だけが作ろうと旗を振ったところで到底できるものではなく、そこに地域の方たちの思いが乗ってこないとできないものだと思う。（市民センター）職員をはじめ、地域の方を巻き込んでいって、これをやろうという思いにさせていく。始めてからも大変な苦労があったと思うが、完成後、西門司市民センターでは慰霊祭や「『未来の種』事業」へと次々に展開していっている。

そのように人を巻き込んで、モチベーションを保ち続けさせていくために、館長がどのような声かけや工夫をしているのか伺いたい。

館　長：　館長というのは、黒子に徹しないといけないポジションだと思っている。（市民センター館長職を）1館目、2館目と経験していくうちに、職員の方から、「前のセンターでどういうことをしていたのか」という質問を聞くようになり、前のセンターでしていたことの成果物や動画、写真などを見せながら説明をすることがあった。

「市民センターでこういう事業がやれるんですね」というところから始まり、市民センター職員が一丸となって、講座から事業に展開していくという醍醐味を自分たちも味わってみたいという気持ちになること、また、職員が自分たちの地域に自主的に目覚めるということがとても大事だと思う。「自分の住んでいる町がだんだん好きになった」と言われることは、私としてはとても嬉しいことである。

ただ住んでいるだけではなくなる、それが地域づくり。そこから地域史を生み出していく原動力になっていくと思う。職員のその気持ちが、（市民センターに）来館する住民の方、利用者の方たちにも少しずつ影響を及ぼしていくのではないかと思っている。

主　事：　事業に関わる職員一人一人が、本当に主体的に関わっているのを見ていて実感した。やらされている感は全然なかった。館長はいろいろな形で今までの成果を見せたり、触れさせて、いろいろな人に関わってもらうことで、職員も刺激を受けている部分があるのではないかと思った。

館　長：　北九州大学生が、コロナ禍で入学しても授業が全くないという状況だったので、（西門司市民センターの）講座に来てくれた。

先ほど（動画で）何回も意見を述べていた学生は一年生で、授業がないので市民センターの講座に参加したというところからスタートして、市民活動がどういう

ものなのかを学んだりした。とてもいい経験をしたのではないかと思う。

コロナなので、普通は全部オンラインで、直に地域の人と触れ合うことは到底できないところ、西門司市民センターで地域の自分史を、その方の自分史を書くために、一人の方にインタビューしながら、その人の人生を自分のものにしていくという事業に参加した。

そして、それが一冊の本になった。そうしたらもう大学生も自分たちの事業という気持ちになり、発展系の慰霊祭でも司会をするというくらいの勢いで関わっていくようになった。

市民センターの職員がちょうど（大学生の）お母さん世代。そして体験者はおじいちゃんおばあちゃん世代。そういう３世代の交流ができ、人と人の関係づくりが成功した例がこれではないかと思っている。

主　事：（動画に出てきた）北九大の学生は、一年生の時にこの事業に関わったとのこと。最初はゼミの先生に言われて戦争体験談を聞きに来たが、結局三つの聞き書きに取り組まれ、そのあとも、座談会での発表や慰霊祭の司会をした。本当にただ参加するというだけではなくて、ちゃんと役割を持って主体的に関わっていると思う。

西門司市民センターの他の事業にも学生がそのような関わり方をしているのを見るが、若い人をひきつけ、繋ぎとめるために館長が何か心がけていることがあれば伺いたい。

館　長：この聞き書きの事業では、区役所のインターンシップで受け入れた学生も参加している。学生は、その時に、このような活動をして、このように事業化して、更にこのように展開していくという説明を聞き、自分もやってみたいと思ったようだ。

そして、大学の先生ともしっかり繋がって、先生にこういう情報を流してください、こういう講座がありますからぜひ大学生に参加するように、もしよければ、拡散してくださいというお願いなどは今でもしている。

主　事：大学の先生も館長の取り組みに信頼を置いているからこそ、学生を送り込むのかとも思う。

また、学生をただのマンパワーとしてではなく、館長が本当に一人一人大切に、丁寧に関わっているからこそずっと繋がっていけるのかと思った。

館長は、東朽網市民センターと平野市民センターでの取り組みから市民活動に展開し、そのセンターの館長を退任された後も一会員としてずっと関わっている。

館長として市民活動を支えていくという面と、自身が活動者として活動を推進していくという面、その両方を経験しているからこそ感じるものや大事にしているものがあるか伺いたい。

館　長：活動者とか活動団体というのが北九州にも多くあると思うが、そういう活動者を生み出していく、活動団体にしていく、そして市民の地域づくりも充実させていくという視点に立てば、市民センターの役割は、その活動者のバックアップ、サポー

トである。できるだけスムーズに、団体として、組織として、動かしていくかというところにある。私は自分自身が館長の立場でもあり、また、市民活動の一員だという意識をかなり持っている。

そのため、立ち上げてきたものに関しては、やはり相談役なりなんなりで関わり、団体同士を繋いでいく、ネットワークづくりというのも、自分なりに意識してやっていっている。

繋がっていくことで、さらに刺激を受けて継続できるということもあるので、団体の継続には結構力を入れている。

主　事：　事業をやって終わりということではなく、その後の展開を見据えた事業の運営などをしているのではないかと感じた。

社会教育自体が、学んでいくだけではなく実践があってこそ、学びが実になっていく、また学ぶからこそ実践を意味付け、意義付けしていくことができると思っている。

言うのは本当に簡単だが、館長はずっとそれを実践してきている。私自身も見習いながら、これからも頑張りたい。

館　長：　興味がある方は、ぜひ一度見に来ていただけたらと思う。

私は書くスキルも高いわけでもない、本を作る専門家でもない。ただ、地域にはそういう方が必ずいて、その方に出会っていく醍醐味を今私が味わっていると思っている。

③ グループワーク

出席委員１２名がA、B、Cの３グループに分かれ、各グループにファシリテーターとして社会教育主事が１名ずつ入り、グループワークを行った。

「市民センター館長の役割とは何か」、「どのように人同士を繋げ、『地域づくり・人づくり』に繋げていくか」について意見を出した。

【グループワーク内容の発表】

Aグループ：　大学生を繋げていくこと、地域にどうやって入っていくかということが非常に大切である。

あくまでも、館長というのはよそ者。よそ者だからこそ見えるものがあるはずで、そこをどのように大切にして、地域の人とコミュニケーションを図っていくのかというスキルが大切という感想も多く出た。

では、どのように地域の方とコミュニケーションを図るのか。（例として）地域の行事やお祭りなどに積極的に参加し、地域の方と繋がりをつくることで、何かあったときには逆に地域の方々が館長をサポートする側になっていくこともあるのではないだろうか。

館長は市民センターに一人だけの会計年度任用職員であるが、その館長が悩ん

だ時に寄り添う人は誰なのか、そういう人がいないといけないのではないだろうかという話が出た。そこで、（相談相手となる）社会教育主事の区ごとの設置人数が問題だという意見もあった。

また、それぞれの館長が学んだことを館長研修や全体研修、区の研修などで発信をしていかなければいけない。そうすることで館長全体の底上げにもなっていくのではないか。

B グループ：　まず感想として出たのが、館長というのは（地域の）サポート役（だけ）かと思っていたが、地域を巻き込んでいき、事業が始まったら、またサポートに徹していくという、（両面で活躍する）新たな館長像が見られたということだった。

いろいろな地域、自治会長、まちづくり協議会長とうまくやっていくことが必要だと思うが、（住民の方たちに、館長は）「自分たちが住んでいる地域に興味を持ってくれる」、「この地域を好きになってくれる」と感じてもらうことが、館長に関わっていこうと思うきっかけになるのではないか、仲良くなっていくためのいい取り組みなのではないかという意見が出た。

館長の姿勢として、どこまで地域の方たちと一緒になって活動していけるかが大事である。

また、大学生に情報を発信していくという点についてであるが、大学の先生と個人的に繋がって学生を巻き込む方法のほかに、大学の中でも情報を収集して学生に流していくようなシステムを持っているところもある。個人的な繋がりだけでなく、そのようなシステムを活用して、学生を呼び込むのも必要なのではないか。

C グループ：　いろいろな世代との繋がりができているということが、やはりこの（事例発表の）事業で評価するべきところではないか。

また、計画の 3 番目の柱の「『学び』と『活動』によるつながりづくり」、ここにかなり焦点を当てた活動になっているということも評価すべき点である。

そして、なぜこのような活動ができたか。館長のスキルもあるのであろうが、ネットワークや経験など、人と繋がることができるというところが大きなポイントではないか。

そして、若い人が地域の中で学べることを考えると、一つの小学校と一つの市民センターというのは、ちょうどいい範囲になっている。そこで、教育的なことを子どもたちや若い人が経験することも、何か一つのきっかけになっていくのではないか。

そして、館長の「繋がりたい」、「出会いたい」、「何かつなげたい」、「面白そう」などの気持ちもとても大事であるが、地域の人が市民センターに行って、「館長、こんな面白いことがあるよ」、「ここはこんなところがあるよ」と言える市民センターの雰囲気づくりも大切ではないかという意見もあった。

また、アンテナを張って（人を）繋げるということ、繋がる・繋げるということは、やはり市民センターの中で本当に大変大切なポイントではないかという感想もあった。

市民センターの取り組みの掘り起こし、館長と職員が話し合いの中で学んで意識を高めていっているということ、ずっと繋げていくということができれば、その館長がいなくなっても、地域はまたそのように繋がっていける。

館長も黒子として、黒子だけれども核となっていく、そして館長が核とならなくても、核となる人物を館長が見つけていくということも大切にされなければいけない。

【議長総括】

議　長：　館長に求められる力量で一番大きく言えるところは、やはり地域の人々とのコミュニケーションをとる能力ということ。コミュニケーションをとる力量、これが必要である。

コミュニケーションをとるためには、まずは館長が地域に関心を示すこと、地域の人々に寄り添う姿勢を持つこと、そして、館長自身が様々なネットワークを作りながら、地域の人たちと繋がっていくということが必要である。

もう一つは、地域の人たちが市民センターに行って、館長と話をしてみようと思うような市民センターの雰囲気づくりも大事だというようなこと。この辺が館長に求められる力量かと思う。

そして、こういった取り組みを広げていくためには、館長次第だということにはならないように、このような良い地域づくりの事例を学ぶ館長研修を年に一度ではなくできれば区ごとに、毎月の学習会のような形で学ぶ仕組みづくりが必要かと思う。

また、そのような学習の場に各大学が入っていける仕組みも作っていく必要があるのではないか。

今回の取り組みで、面白い、いいなと思ったのは、一人一人が、脚光を浴びていること。一人一人が自分の人生を語ることで、一人一人が脚光を浴びる。顔の見える学習だと思った。

また、それをまとめる分析者の方もグループで一本書くのではなく、一人一人自分の視点でまとめている。

関わっているすべての人の顔が見える事業だと思った。その点も素晴らしいと思う。